

はぐくむ 子ども食堂でシャウト

私の気持ちを聞いて！

Eテレで放送されている障害者や多様性をテーマにした番組「パリパラ」に今年5月、出演する機会があった。大阪府南部のM市に「やんちゃま食堂」という子ども食堂がある。

子育て支援を通して、地域や人とのつながりをつくる「場」の提供を目標に活動する市民グループが商店街の空き店舗を利用して、毎月2回程度、開いている。「パリパラ」はそこで行われたイベントを紹介していた。商店街の人たちを前に「わたしたちの気持ちを聞いて！」「キッ

ズシャウトフェスティバル」が開かれた。

最初に「シャウト」した小学生のけんじ君は「今度、食堂で一緒にごはん食べませんか」と呼びかけると、商店街の人たちはいつせいに「いいよっ！」と応えていた。日本人の父とフィリピン人の母の間に生まれたけんじ君は日本に来てまだ数年。授業で先生の日本語がわからず「だれか僕に日本語を教えてくださいませんか！」ともシャウト。

人の子どもを育てている。日本の学校の仕組みや制度がわからず、子育てに悩むが、言葉も難しく、相談できる人も周りに少ない。「私とママ友になつてくれませんか！」というシャウトに、商店街で洋品店を経営する女性が「私も相談に乗れるし、年齢の近いお客さんも紹介できますよ」と応えた。

統合失調症と身体障害のある父親と暮らす高校生のはるかさんの「私もお父さんも、やんちゃま食堂に出会って元気になりました！」というシャウトには、商店街の人たちも涙だった。

堂にやってきた。やんちゃま食堂は、地域住民と困難を抱えて生きる子どもや親たちと学校をつなぐ役割も果たしている。貧困と格差に苦しむ子どもたちや親を支える市民の活動、地域を支える教育活動は、地域社会のネットワークなくして考えられない。

私たちがさいたま市内で「たまりば」という若者向けの居場所を始めて10年。不安定さの中で生き、学校にも家庭にも居場所がない子どもや若者たちは増え続けている。「やんちゃま食堂」も「たまりば」も、そんな子どもたちにとって欠かすことができない場になっている。

(さいたまユースサポートネット) 代表 青砥恭